

ラジオ放送
＜平成29年4月～6月放送分＞

ON AIR



金光教の声

No.419

もくじ ~ contents

<こころの散歩道>

☞ 軽い音楽に乗せたちょっといい話

- ヒーローの笑顔 page 1
- 伝える page 6
- 雨へのお礼ができてなかった page 10
- 小さな親切 page 14

<あなたへの手紙>

☞ 悩みや疑問にお答えするQ&A

- 第1回 やる気のない息子／人は皆神の子? page 18
- 第2回 参拝時に必要なこと／子どもの喘息 page 23
- 第3回 仕事のミスが多い／幸せとは何? page 27
- 第4回 神棚と仏壇／家事を手伝うと妻が怒る page 31
- 第5回 「金光」の意味／自分なんて必要ない page 36

<先生のおはなし>

- 信心の賜物
京都府・東九条教会 上手正弘 page 40

<信心ライブ>

☞ 金光教の集会で行われた発表や講話などを紹介

- 感謝のパワー page 44

<先生のおはなし>

- 幸せが実る心
福岡県・不知火教会 池本ひろ江 page 48
- 心のよりどころ
富山県・石動教会 宮田美子 page 52

《こころの散歩道》

「ヒーローの笑顔」

ああ、間に合った。

やっとの思いでホームに駆け込みました。情けないかな、ちよつと走っただけで、息も絶え絶え。こんなに寒い朝だというのに、汗をかいてしまいました。

一息つく間もなく、電車が入ってきます。

ドアが開いて、乗り込もうとした時。

「あのう…」

最初は、呼び掛けられたのが自分だとは気が付きませんでした。

「あのう」

振り返ると、市内の中学校の制服を着た二人

の少女です。肩で息をしながら、赤い顔で、白い息を吐いています。

「これ、落としましたよ。さっき、改札の所で」

見ると、一人の手にはマフラーが。

「あ。どうも。ありがとう」と、何とも間の抜けた返事をしながら、受け取り、乗り込んだところで、電車のドアが閉まりました。

いつの間に落としたんだろうか。急いでいて気付かなかつた。え、改札の所で？　ここまで追い掛けてきてくれたの？　と、一瞬のうちに思い、ドアの外を見ると、二人は、まだ息を切らしながら、「良かったね」とは聞こえなかつたけれど、そんなふうにもうれしそうに、赤い顔を見合せています。

ゆつくりと動き出した電車の窓から、「ありがとう」と声には出さずに、二人に頭を下げました。

電車に揺られながら、考えました。

あの二人は、前を走って行くおじさんがマフラーを落としたのに気付いて、それを拾って、改札の所からずっと、追い掛けてきてくれたのだろう。階段を上って、一番線から六番線まで跨線橋を渡って、そして階段を下りて、ホームまで走ってきてくれたのだろう。…何ということだろうか。

そして、落とし主に追い付いて、ようやく手渡せたことを、あんなふうに喜んでくれている。その笑顔たるや、きらきらと輝かんばかりで。

それに引き換え、こちらの受け答えの、何と

気の利かないことであつたか。もうちょっと、ちゃんとお礼が言えなかつたものだろうか。いや、そんなことよりも、どうしてあの二人は、あんなことが出来たのだろうか。そして、それを喜んでくれたのだろうか。



そんなこんな、行きつ戻りつ考えていて、思い出したのが、何年も前の出来事でした。

ある晩、仕事終わりに同僚と数人で、ちょっと飲みに行った帰り道のことでした。

あいにくの雨が、だんだんきつくなつて、いつの間にか大雨になっていました。傘を差しながら歩いていると、雨の音にかき消されるようにして、「ニャーニャー」と、か細い声が聞こえてきます。

「子猫じゃない？」

「うん」

「あ、あそこあそこ」

一人が指さした、街路樹の根元の所。そこに一匹の子猫。ニャーニャー鳴きながら、おぼつかない足取りでよちよち歩いています。

「親猫とはぐれたんだろうか」「ずぶ濡れになつちやうて…」「かわいそうに、大丈夫かな」

などと、口々に言いつつ不安で見守る目の前、雨で足を滑らせたのか、道路脇の用水路に…。

「あ！」

みんなが叫ぶより早く、一人の同僚が、普段の仕事では見せたことのないようなすさまじい瞬発力で、幅二メートルほどのその用水路に飛び込んでいました。そして、ひざまで水に漬かりながら、子猫の救出に無事成功。

それほど運動神経の良い方でもない彼が、今夜まさかのヒーローです。一同思わず拍手と歓声で彼を讃えました。

彼は、照れくさそうなほにかんだような、でも、何とも言えない良い笑顔を雨に濡らしな



がら輝かせていました。

一方、子猫はといえば、振り向きもせず、さつきまでのか弱い様子からは信じられないくらい、えらい勢いで逃げ去っていつてしまいました。

その子猫の後ろ姿と、取り残されたヒーローのはにかみ笑顔が、絶妙のコントラストとなつてみんなの笑いを誘つたのでした。

あんなことがあつたなあ。そういうえば、その後、電車に乗つたはずだけど、どうやって帰つたんだろうか。あんなずぶ濡れになつちやつて…。

思い出し笑いをしている自分がおかしくて、ふと我に返りました。何で、こんな昔のことを

思い出したんだろうか。

電車に揺られながら、また、ちよつと考えました。

ひよつとして、こういうことだろうか…。

今日のさつきの少女二人の笑顔が、あの晩のあのヒーローの笑顔を思い出させたのかもしれない。姿形は似ても似つかないけれども、なぜか不思議に重なつて思い出された、そういうことかもしれない。そんなふうに思いました。

「気の毒に」とか「可哀想に」とか思うと、何とかしてあげたくなる心は誰しも持つています。それは、理屈じゃなくて、人間としての本能みたいなものかもしれません。だから、いろいろ考えるよりも前に体が先に動く、ということも、また、きつと、自然なこと。

マフラーを拾ってもらえて良かった。助かった。電車を降りれば寒空の下だから…。もちろん、それもあります。でも、もつと大切なことを二人の笑顔から教えてもらった気がします。

人は、誰でも良い心を持っている。だから、それがそのままに出れば、あんな素敵な笑顔になれるのだ。

ありがとう!



《こころの散歩道》

「伝える」

私が、ある山あいの小学校の子どもたちと関わるようになったのは、一本の電話からでした。

「突然お電話して申し訳ありません。私は、全校生徒合わせても六十名足らずの小学校の校長です。毎年、市の主催で音楽集会有るので、吹奏楽では、どんなに頑張っても他の学校に見劣りしてしまい、いつも子どもたちが、がっかりして帰ってきます。子どもたちのためにと考えまして、ハンドベルなら、少人数でもいい演奏が出来るのではないかと思いました。そこで、指導者を探していたところ、知り合いがあなたを紹介して下さいって…」というお話で

した。

ハンドベルというのは、ピアノの鍵盤の音が一つひとつ楽器になっているようなものです。



私は、ハンドベルに三十年近く関わってきましたが、音楽の教師でもない私にそんな大役が果たせるのか自信がなく、戸惑いました。けれども、私がすぐに断れなかったのは、がっかりしている子どもたちが、元気になるお手伝いが出来るというところに、おせっかいな私の心が動いたからです。しばらく考えましたが、答え

は出ず、妻から、「これには何か神様の思いがあるのかも知れないわよ」と、後押しされ、受けることにしました。

私の住んでいる市街地から、車で四十分。どんだん空気が澄み、山の緑が濃くなっていきます。この地区は、お茶が栽培され、特に玉露は全国的にも有名な産地です。道路の横には、川がきらきらと流れています。

学校に着き、いよいよ小学四年生と五年生の子どもたちのご対面です。どの子も、素直そうな顔で、真つすぐに私を見ている目が、きらきらしていて、私はすっかりこのきらきらパワーにやられてしまいました。かわいい。この子たちと一緒にベルをやりたい。音楽集会では自信を持って演奏し、満足して欲しいと心から思

いました。

私は、ベルを演奏する前に、子どもたちに、二つのお願いをしました。一つ目は、「諦めないこと」です。私が関わってきたハンドベルメンバーは、音符が読めない人ばかりでしたが、とにかく続けることで上達したので、「みんなも諦めないでね」とお願いしました。そして、もう一つは、「心をそろえる」ということ。これが、ベルをやってきて一番大切だと思うことです。楽譜通り間違えずに演奏することも大切ですが、ベルという楽器は、心をそろえてその音が重なった時、不思議に相手の胸に響く音になることを話しました。みんな真剣な表情で聞いてくれました。

初めはおっかなびつくりベルを触っていた子

どもたちも、次第に慣れ、心をそろえるための地味な音出しの練習をまじめに続けてくれました。子どもたちの上達は、思いの外早く、とにかく言われたことは、何でも覚えてしまう子どもの純粹さに、こちらまで心洗われる思いと責任を感じました。私は、月二回子どもたちに会えることが、楽しみになりました。

そして、迎えた音楽集会。私は、あいにく行けませんでしたが、会場では、ベルの音色のすばらしさにどよめきがあったと、後日、校長先生が熱く語ってくれました。当然子どもたちは、自信を付け、誇らしい気持ちで帰って来たことを聞き、私も本当にうれしく思いました。

今年度最後の授業で、来年、音楽集会に出て

ベルを演奏する下級生に、上級生がベルの指導をしていました。一人の上級生に、「何て教えてあげたの？」と聞くと、「指揮をよく見て。そうすれば心がそろうよ。うちの学校のすごいところ出せるよ」と伝えたそうです。その姿はとてもほほ笑ましく、頼もしく、本当にいい顔をしていました。下級生は、あどけないながら真剣に受け止めていました。

私も色んな人との関わりの中で、このことだけはどうしても伝えたいと思うことがあります。相手のことを思つて、言葉を尽くして伝えようとするのですが、それがいくら理屈にかなっていても、相手の心に届かないことがよくあります。そんな気持ちを、妻に話したら、「私

はね、最近、話をする時、『あなたのことかだーい好きだから』という気持ちで話しているの」ということを聞かされました。

「だーい好き」か……。なるほどと思いました。

私ときたら「全く困った人だ。そんなことしてたら痛い目に遭うのに、どうして言うことを聞いてくれないのか」と、どちらかというと腹立たしい気持ちで、正論をまくしたてるが多かったのです。言いたいことは、八割で押さえ、後の二割は大好きだという気持ちで、どうぞ分かってくれますようにと祈っていく。そのことが、伝わるための大切な中身なのかなと考えさせられました。

「あっ！ そうか」

校長先生が子どもたちのことを思う「だーい好き」という気持ち。上級生がベルに出会い、ベルで学校の良さを表したいという、学校が「だーい好き」という気持ち。これが、あの時、下級生にも伝わったんだ。

思いがけない誘いで出会った「だーい好き」な子どもたちから、私にも心に残る温かいものが伝わってくるのです。



「雨へのお礼ができてなかった」

今年も、もうすぐ雨の季節がやってきますね。

皆さんは、雨は好きですか？ まあ、雨が好

きだなんていう人は、そう多くないでしょうね。

傘を差すのが面倒だし、暗いし、カビは生える

し、洗濯物は乾かないし、何かと不便です。私

も正直なところ、やっぱり晴れた日の方が心地

良くて、好きですね。

でも、雨が降らないと水が無くなる。「水は

私たちの命の元」と言ってもいいくらいなもの

ですから、雨が降るからこそ、私たちは生きて

いけるわけで、そう考えていくと、雨というの

は、命の恵みが天から降り注ぐということ。こ

れに文句を言っでは、身勝手というものでし
う。

自分の都合や気分だけで雨のことは見てきた
のが申し訳ないことだったなあと、この頃ちょ
っと反省しているんです。

五十歳を過ぎたところに、私は趣味でシイタケ
栽培を始めまして、それが切っ掛けで、お湿り
というものの有り難さを実感するようになりま
した。鉢植えのランも喜んでいろいろですしね。
ですから近頃は、雨もそんなに嫌いじゃありま
せん。

それにしても、私たちが天気のことを口にす
る時、喜ぶ言葉はめつたになくて、「暑いです
ね」「寒いですね」と、嘆くようなセリフが圧
倒的に多いですよ。雨なんかは特に「降りま

すねえ」と、降っただけで文句を言われていま
す。

日照りが続けば「少しは降ってもらわんと困
ります」なんて言うし、降っても降らなくても
迷惑がられる雨。命の水を運んでくれているのに、
割が合わないですよ。お気の毒なことです。

私は、自分のそういう身勝手さが気になるよ
うになってから、雨に対して、文句だけは言う
まいと心に決めました。そしてその「一人キャ
ンペーン」を現在実施中です。まあ何とか実行
出来て、不平は言わずに来ていますが、お礼の
方はまだまだ足りない。これが次なる目標です。

私の住む岡山は晴れの日が多いのですが、そ
れでも中国山地や三本の大きな川があり、ダム

が整備されたおかげもあって、少々日照りが続
いても、ありがたいことに水の心配はほとんど
ありません。

ところが、かなり前のことですが、長い間、日
照りが続き、猛暑と相まって県内にある水がめ
の多くが大ピンチに陥ったことがありました。
その時はみんな焦りました。給水制限なんて、
ほとんど経験したことがなかったのですから。

「たくさんあるうちは自由に使えばよい」と
いう考え方で、日頃の備えを怠っていることに
も問題があるように思うのですが、そんなこと
は棚に上げ、ピンチになったのは何もかも雨が
降らないことのせいにして、空に文句を言いな
がら、みんな必死で節水を始めました。普段か
ら無頓着な使い方をしていますから、いざ節水

となると大変でした。

水の豊富な岡山に引き換え、お向かいの香川県では、よく水枯れが起こるようです。山が急で、大きな川が無いせいもあるのでしょう。そのことを香川県に住む友人に聞いてみると、「昔から香川に住んでる人の家にはたいいてい井戸があるし、まあ、もともと雨の少ない所だから、降らないからと言って、とりたてて不平を言う人は少ないんじゃないかなあ」。

そんな彼の話を聞いていて、以前、北海道の友人が遊びに来た時のことを思い出しました。季節は冬だったのですが、部屋の中で、「寒い」を連発していたら、その彼が、「北海道は寒いに決まっているので、誰もそんなに寒い寒いと言わないよ。うちには薪ストーブがあるから、

室内は冬の間ずっと暖かい。ま、その代わりに、冬が来る前に薪の準備をしておくのが大変だけだね」。

北海道の人たちは、寒さへの準備を十分に整え、覚悟を決めて冬を迎えるのだという。なるほど。それに引き換え、私はどうでしょう。温かな気候に恵まれているのをいいことに、冬支度をろくすっぽししないで、ちよつとの寒さで愚痴を言っている。

恵まれていたら、そのことを喜ぶのが当たり前だと思うのですが、そう単純なことではなさそうです。恵まれていればいるほど、その有り難みが見えなくなつて、わずかなことにも不足が出やすくなる。ああ、そうはなりたくないなあ。

朝起きると、早速トイレで水を使います。続いて顔を洗うにも炊事にも洗濯にも入浴にも水を使い、体の中にも水を取り入れます。これはすなわち、知らず知らず雨のお世話になっているということですよ。雨はほんとに、ありがたい。

そこで私は遅まきながら、六十を過ぎた今からでも、「雨にお礼を言う」という一人キャンペーンを開始しようと思います。

さて、具体的にはどうするか。一日の生活の中で、水のお世話になる回数が一番多いのは何かと考えてみると、出た答えは「水洗トイレ」でした。雨が降らないと、実はトイレにも行けなかつたんです。これは大発見でした。

そこで、雨への感謝を忘れないための自分だ

けのスローガンを考えてみました。出来たのが、これ。

「雨が降らねばトイレにも行けない」
雨の度に、このスローガンを思い出して、お礼を言おうと思います。



《こころの散歩道》

「小さな親切」

私が仕事で大阪から京都に向かう電車内での出来事です。車中の席は座れそうで座れない感じ。キョロキョロと辺りを見渡すと、数年前、私の娘が通っていた高校の女子生徒が二人座っていました。この時間だとクラブ活動の早朝練習かなと思いつつ、娘の高校時代の姿と重なって、懐かしく愛おしく思えたのです。

途中の駅からおなが丸が大きく膨らんだ妊婦さんが乗車してきました。



ちょうど、二人の生徒の近くに立とうとした時、彼女たちは耳元でヒソヒソ話をしています。

「席、譲ったほうがいいかな？」

「うん、お母さんは大変って言ってたよ」

「じゃ、私が譲るわ」

「ハルちゃんは足が痛いでしょ」

ハルちゃんの左足首には包帯が巻かれています。ところがハルちゃんは間髪を入れずに、「次の駅で降りますので、どうぞ」と、その女性に声を掛けたのです。

女性はほほ笑んで、「ありがとうございます」と席に座りました。

そして、二人は恥ずかしそうに別の車両に移動していききました。

私はなんて良い子たちなのだろうと思いまし

た。ハルちゃんは足が痛いにも関わらず、それに次の駅で降りるわけでもなく、妊婦さんに氣遣って席を譲ったのです。彼女たちが見せた思いやりは、周囲の人たちまで温かくしてくれました。とつても勇氣ある行動です。勉強も大切ですが、ずっと価値のあるもの。それは人間味あふれる生き方が出来るということ。彼女たちの小さな親切が回り回って、いつしか彼女たちが困った時には、誰かが手を差し伸べてくれることを願って、私は彼女たちを見送りました。

私が自宅で仕事の原稿を執筆していた時の出来事です。突然の激しい雨。今日の天気予報は晴れなのだと思います。慌ててパソコンを閉めて、身をすくめていました。

外を見ると、傘を持たずに行き場を失ったスツ姿の男女が、小さな店の軒下で雨宿りをしています。二人の間に会話がないことを思うと、どうやら他人のようです。この閉塞的空間から一刻も早く抜け出したい様子ですが、雨の勢いは一向に弱まる気配がありません。男性は次の予定があるのか、時計を気にしています。

これ以上傍観しておれなくなった私は、家にあるビニール傘を数本取り出し、ためらうことなく二人の元へ駆け寄ったのです。

「これ、どうぞ使ってください。差し上げます」と傘を差し出しました。私は、おせっかいは警戒されるかなと一瞬思いましたが、「いいんですか？」という二人の笑顔に少し救われた気がしました。二人は感謝の意を表して、足早に去

ったのです。

「ああ良かった」

ちょうど同じ時刻、私の父も別の場所での豪雨に遭っていました。病院の帰り道、大粒の雨が勢いよく落ちて来たので、ガレージの屋根の下へと駆け込んだのです。そこには、六十代後半と思われる男性が一人、先に雨宿りしています。しばらく二人で空を見上げていましたが、雨は一向にやみそうにありません。

男性は携帯電話を取り出し、「傘を持って来て」と、誰かに電話をしています。携帯電話を持たない父は、雨がやむことを願うことしか出来ません。それから数分後、男性の奥様らしき女性が傘を二本持ってやって来て、男性に手渡

しました。すると男性は、「これ、どうぞ」と父にそのうちの一本を差し出したのです。驚いた父が、「今、小銭を持ってませんし、後でお返ししますの」と応えようと、「いえいえ、この傘は、親切な人からもらったものです。差し上げます」と言われます。父は二人に何度も頭を下げ、謝意を述べて別れたのです。こうして父は雨に濡れることなく、このご恩をどう返せるのかと思いを巡らせながら帰路についたのです。

実はこの話、ここからがもつと素敵なのです。それから数日後のことでした。私は職場の間関係や仕事で、心身共に疲れ切っていました。ようやく休日が来たと思ったら、この日も朝から携帯電話で上司と仕事のやりとりがあり、少

しイライラしていた時のことでした。

「ピンポン」と玄関のチャイムが鳴り、ドアを開けるとスーツ姿の男性が立っていました。

「先日、大雨の日に傘をお借りした者です」。

ああそういえば…。私は傘のことなどすっかり忘れていました。すると男性は、満面に笑みを浮かべて、「実はあの時、新規の商談に行く時で、傘をお借りしたので間に合いました。あなたのおかげで、商談が成立したのです」と丁寧に礼を言われました。そして、「私と同じように困った方がいたら、またこの傘を貸してあげて下さい」と傘を返されたのです。

私はその時、何かが自分の心の扉をノックするのを感じました。この男性と再会することによって、ここ数日間のイライラが一気に解き放

され、私自身が救われたのです。そして後に残ったものは、なんとも体が溶けそうなほど心地いい、すがすがしい気持ちでした。

知らない人同士が小さな親切でつながっていく。素敵なことだと思いませんか。小さな親切は、他人へのちょっとした気遣いなのですが、回り回っていつか自分や家族や周りの人たちに返ってくることもあるかもしれません。



《あなたへの手紙》第一回

「やる気のない息子

／人は皆神の子？」

おはようございます。兵庫県・出石教会の大
林誠です。

今日はまず、愛知県にお住まいの五十二歳の
女性のお悩みです。

「私は夫を早く亡くし、夫婦で経営していた
フラワーショップを一人で切り盛りしながら、
一人息子を育ててきました。その子が一昨年よ
うやく大学を卒業し、『店を手伝う』と言って
帰ってきたので、私はともうれしかったので
すが、息子が張り切っていたのは最初の一カ月

ぐらいで、今は昼頃にやっと起きてくるという
有り様です。早く仕事を覚えなければ、先々本
人が困ることになるのですが、叱ると、『言わ
れなくても分かっている』と反発するばかり。そ
んな息子が歯がゆくてたまりません。どうすれ
ば息子がやる気を起こしてくれるでしょう
か？」

こんなお悩みです。

店の経営と子育てと、これまで本当に頑張っ
てこられたんですね。そのご苦労を間近に見て
いるからこそ、息子さんも、早く親孝行をした
いと思って帰ってこられたんでしょうね。優し
いじゃないですか。そんな息子さんですから、
きっとあなたの今の気持ちも、よく分かってい

ると思いますよ。

フラワーショップといえば、体力も知識もセ
ンスも必要となる、大変なお仕事だろうと思
います。それだけに、若くて元気なうちに色々
勉強しておかなければと、親からも言われ、本
人も分かっていながら、それでも仕事に打ち込
めない。甘えだと言ってしまったばそれまでです
が、きっと息子さんも、今、自分自身の不甲斐
なさを嘆いて、もがき苦しんでいるんじゃない
でしょうか。

親としても、つらいですよ。子どものため
を思って叱っているのに、かえって反発を招き、
逆効果になる。となると、今はその心配を子ど
もに直接向けるのではなくて、神様に向けてい
く。心配を願いに变えて、祈りながら待つ。そ

れしかないと思うんです。親心とは、切ないも
のですね。

神に願ってどうなるものか、とお思いかもし
れません。でも、一心の願いには、神様は必ず
応えて下さいます。

あなたとほぼ同年輩の女性で、息子さんとの
関係で悩み、教会に参拝するようになった方が
ありましてね、この方は何度も参拝を重ね、神
様の前で自分の心を見つめるうち、こうして悩
んでいるのは、子どもがこの上なく愛しいから
だ。そんな子どもを神様から頂いているのだと、
我が身の幸せに気付かれたのです。やがて、息
子に感謝する気持ちまで湧いてきて、そこから、
もつれていた親子関係が次第にほぐれていきま
した。

元々は、息子が変わってくれますようにと願ってお参りされたんですけれども、思い掛けないことに、信心によってまず自分自身が変わってたんですね。それが助かりへの糸口になりました。

あなたの願いに、神様はどう応えて下さるか。それを楽しみにしながら、金光教の教会を訪ねてみてください。



次は、東京都にお住まいの四十五歳の男性から頂いたご質問です。

「近年、世界各地でテロが起こり、国内でも凶悪犯罪が後を絶ちません。ところが金光教のラジオ放送では、「人は皆、神の子」などのおんきなことを言っています。そんな奇麗事では済まされないのが現実ではないでしょうか？」

このようなご質問です。

ラジオ放送を通して金光教の教えを覚えていて下さったんですね。ありがとうございます。

おっしゃる通り、金光教では、「人は皆、神の子」だと教えられています。そして、人と仲良くしたい、優しくしたいという「良い心」も、

神様から授けられてこの世に生まれてきたと考えています。

もちろん、世の中には鬼のような心の人もないとは言えません。でも赤ちゃんの時から悪人であるような人はいませんから、きつと何か訳があつて、不幸にも、その良い心が閉ざされてしまっているに違いない。

どんなにひどいことをする人を見ても、「この人に一体何があつたのだろうか。もしかしたら自分も、境遇によつてはそうなつていたかもしれない」と想像する心の余地を失つてはならないと思うのです。

殊に今は、人間に対する信頼や安心感が揺らいでいる時代です。不確かな情報が飛び交い、多くの人々が一気に憎しみを燃え上がらせて、

戦争にさえ突入してしまいかねない、危険な時代でもあります。そんな時代だからこそなおさら、一時的な感情に惑わされず、奇麗事と片付けず、「神の子」としてどこまでも人を尊ぶ態度が、ますます大切になっていると思うのです。

金光教の教祖は、ある人に、「日に日に悪い心を持つなよ。人に悪いことを言われても、根に持つてはいけない」と話したことがあります。その人が、「それでも、向こうが悪い心を持って来れば悪い心になります」と口答えすると、「それでも、悪い心を持つてはいけない」と諭したとのことでした。

悪いことをされたら仕返しをしたくなるのが人情。しかし、それを克服出来なければ、争いの連鎖を断ち切ることは出来ません。相手の「悪

「いい心」に惑わされない「それでも良い心を」という決意を、一人ひとりがどこまで持ち続けられるか。世界の平和はそこに懸かっていると私は思います。



「参拝時に必要なこと

／子どもの喘息」

おはようございます。大阪府の堺市にありま

す、金光教鳳教会の工藤由岐子と申します。京都府にお住まいの佳祐さんという四十代の男性からのご質問です。

「僕は元々、宗教に関心がありませんでした。

ただ最近、仕事のことや家族のことなどで色々と思うことが出来まして、心のよりどころが欲しくなりました。普段、金光教の教会の前をよく通りますので、入ってみようかと思うのですが、どうも敷居が高く勇気が出ません…。先に

聞いておきたいのですが、教会に入るにはいきなりでは失礼ですか。時間のお約束をしてから行く方がいいですか。それと、初めての場合には、手続きなどもありますか？」

このようなお尋ねです。

佳祐さん、ご質問ありがとうございます。教会の前をよく通っておられるのですね。確かに、知らない所に入るのは勇気が要りますよね。インターネットで見たとしましても、分からないこともあるかもしれませんね。

金光教は、日本を中心に千五百程の教会がありますが、どなたにでもご自由に参拝して頂くことが出来ます。前もつてのお約束などは、しなくて大丈夫ですよ。教会が開いている時でし

たら、遠慮なく訪ねてみて下さい。手続きとかもありませんよ。

佳祐さんは、お仕事のことや、ご家族さんのことなどで、色々思われることがあって、心よりどころが欲しくなったと言われていますね。教会には金光教の教師がいます、どんなお悩みでも聞かせて頂いております。どうぞお気持ちを楽にして、よろしければお話し下さいね。

教師は、お参りに来られる方お一人おひとりの思いや願いをじっくり聞かせて頂きまして、お祈りをさせて頂きます。こんなことを話したらどう思われるだろうかとか、ささいなことを言うのは恥ずかしくないだろうかとかは、何も心配ありません。もちろん言いたくないこ

とは、無理に言わなくて構いません。教会に足を運んで頂きますと、中の様子も分かって頂けるんじゃないかと思えます。

また分からないことがありましたら、何なりと教会の先生にお尋ね下さいね。何でも答えて下さいますよ。それでは佳祐さん、お体にも気を付けてお過ごし下さい。ご質問ありがとうございます。ございました。

次に紹介しますのは、愛媛県の夏美さんという二十代の主婦の方からです。

「私には小学校一年生の女の子がいますが、幼いころからぜんそくを起こしやすい体質です。学校もよく休むので可哀想になります。何

度も繰り返すうちに、だんだん私がつらくなってきました。成長と共に治ると言われましたが、いつまで続くんだらうと思ってしまうたり、目の先のことしか見えなくなるのです。どう向き合っていけばいいでしょうか？」

このようなお悩みです。

夏美さん、聞かせて頂きました、ありがとうございます。ございます。あなたのお母さんとしての優しいお気持ちが伝わってきました。子どもさんが苦しそうにしている姿は、本当つらいですよ。

実は、私も以前、夏美さんと同じ経験をしています。私には二十五歳の息子がおりますが、その子が小学校五年生くらいまで小児ぜんそくでした。一番ひどかった時期は幼稚園の年少組

の時に、半分くらい休んでいたと思います。遠足や運動会のシーズンは、いつもダウンしていました。

夏美さんのつらいお気持ち、よく分かります。打ち明けて下さり良かったです。私も最初は、慣れない子育てに随分戸惑いました。でも、今だから言えることなのですが、息子は何年もよく病気に耐えてこられたなと思います。夏美さんの娘さんも、よく頑張っておられます。子どもさんは多分、自分がお母さんに心配を掛けているということ、ぜんそくの発作が起きる度に感じておられると思います。

かつては私自身も夏美さんと同じような気持ちでしたが、ある時、私の顔を子どもが悲しそうな目をして見ているのに気付いたんです。ハ

ッとしまして、思わず息子をぎゅっと抱きしめました。「大丈夫だよ！ 治るよ」という言葉が自然と出ました。すると子どもは、のどがヒユルヒユルと言いながらでも、私の胸に顔を付けて、穏やかにすやすやと眠り始めました。抱きしめられていると、あったかいですもんね。子どもの寝顔を見ながら、私もいつの間にかウトウトしていました。その時は、大変な中にも緊張が溶けるようでした。夏美さんもぜひ、スキンシップを増やしてみてください。お勧めですよ。

子どもさんは、いずれはお母さんの手から離れて、巣立つ日が来ます。子育ては永遠じゃありませんので、幼いお子さんとの今の関わりを大事になさってくださいね。

振り返りますと、うちの息子も長い間ぜんそくで苦しみましたが、そのことがあったから、辛抱強い子に変わらせて頂き、人を思いやる気持ちにもならせて頂いたように思います。経験は全て、無駄にはならないのです。乗り越えさせて頂きましょうね。神様が、いつも見守って下さっていますからね。これから先のことを楽しみにしててください。それでは夏美さん、お体には気を付けて頑張ってくださいね。お祈りしています。



「仕事のミスが多い

／幸せとは何？」

おはようございます。私は福岡県にあります、

北九州八幡教会の野中正幸と申します。

最初に、三十代男性の方からのお悩みです。

「仕事でミスや物忘れが多く、上司によく怒られます。気を付けようと思っても、特に、忙しくなると失敗してしまいます。そんな自分が情けなく、嫌で嫌でしょうがありません」

このような内容です。

そうですか。気を付けようと思っても、

ついついミスしたり、忘れてしまったり。私
もかつて、会社で業務が重なり、途中で用件が
入ると、大事なことを後回しにしまい、結
局ミスしたり、忘れてたり、という経験がありま
す。

そんな時はとても落ち込んで、あなたのように、自分が嫌で嫌で仕様がなない思いになりました。でも自分を否定する心になってしまったり、萎縮してしまったり、仕事にも身が入らず、ますますミスを引き起こすことになりました。

そういう時に私が大切にしたのは、出来たことを喜んで、神様にお礼を申し上げる時間を作ることでした。どうしても失敗ばかりに目がいってしまいますが、いつもしているような、ちよつとした小さなことでも、出来たことを喜び、

お礼を言うことに心の向きを変えていきました。すると、だんだんと、「ああ、こうして日々、命を頂いて、仕事を頂いて、今働けている。それがまずありがたいことなんだなあ」という思いになってきたんです。

そうやっていくと、だんだんと自分を否定する心ではなく、失敗はきちんと反省して、次に生かそうとする前向きな心が変わっていきました。また、冷静に、「どういう時にミスをしたのか」と考えるようにもなりましたよ。どんなに忙しい時でも、「今からこれこれをさせて頂きます」と、心の中で良いので、仕事の前に神様にお願ひし、後には、「終わりました。ありがとうございます」と、神様にお礼を言い、喜ぶことが大事です。心を落ち着けるこ

とにもつながりますよ。

仕事の上で、たとえ怒られたとしても、それはあなたの人間性を否定されているわけではありませぬ。人間の値打ちは、仕事の出来不出来とは関係ないのです。人は皆、神様から等しく、尊い命を頂いた身なのですから。

金光教の教えに、次のようなものがあります。「もし、五本の指が、みな同じ長さでそろっていても、物をつかむことができない。長いのもや短いのがあるので、物がつかめる。それぞれ性格が違うので、お役に立てるのである」というものです。

自分の良い面はなかなか自分では気付けないものです。自分を「嫌だなあ」と思った時は、この五本の指の教えを思い出して下さい。あな

たにはあなたの良い面、役割があり、きっとあなたが気付いていないところで、お役に立っているのですよ。

次に、四十代女性の方からのご質問です。

「最近よく『幸せとは何か』ということについて見聞きします。人間の『幸せ』とは何でしょうか？」

このような内容です。

「幸せとは何か」。難しいですね。幸せと考えるかどうかは、人によっても色々違うような気がします。例えば、「こういうものが手に入ったら、こういう状況になったら幸せになれ

るのになあ」と思うことがあると思います。でも実際に欲しいものが手に入ると、さらにまた別の欲しいものが心に浮かんできます。

欲しいものを手に入れるために、向上心を持って頑張ることは大事なことです。他人と自分を比較して、無いものが欲しいと思うような欲求には、切りがありません。

では、幸せについて、ちよつと発想を変えて考えてみたいと思います。

私たちは日々の生活の中で、心配や不安、不平不満、イライラや悲しみ、そういった気持ちになることは避けられません。予想外の悪い出来事に出遭ってしまふこともあるでしょう。生きていく以上、少なからず起こることです。

私は、そのような、いわばマイナスの気持ち

を吐き出す場所があるかどうか。つらい時に支えとなる場所があるかどうか。不平不満があったり、イライラしてどうしようもない時に心落ち着ける場所があるかどうか。それが「幸せ」を考える上で、とても大切になるのではないかと思います。

金光教の教会には、「広前^{ひろまえ}」という神様に向かって祈り願う場があり、さらに、「お結界^{けっかい}」という場に教会の先生が座っておられます。参拝された方は、先生に自分の願いや思い、不安や心配事などをお話しし、一緒に神様に願って頂きます。そして先生から色々とお話を聞かせてもらい、心の向きを前向きに、良い方向へ変えていくことになっていきます。お結界は神様と私たち人間とを結んでくださる場です。

そのような、いつでも心の支えとなる場や時間があるということが、安心、ひいては「幸せ」へとつながっていくのではないのでしょうか。そしてきつと、何気ない日常の中にも「幸せ」が満ちているのだと思いますよ。



「神棚と仏壇」

／家事を手伝うと妻が怒る」

皆さん、おはようございます。西に六甲山を望む、兵庫県尼崎市にあります、阪急塚口教会の古瀬真一と申します。どうぞよろしくお願い致します。

早速ですが、大阪府にお住まいの三十七歳男性、山田さんからのご質問です。

「私の実家には、両親が大事にしてきた神棚と、先祖の仏壇があります。先日、父が亡くなったのですが、ある人から、『神棚と仏壇を一緒に祭っていると、神様と仏様がけんかするか

ら良くない』と言われ、気になっています。本当のところ、そんなことがあるのでしょうか？」

このような内容です。

山田さん、ご質問ありがとうございます。お父様が亡くなられたのですね。ふとした時にお父様の姿が思い浮かぶ、そんな日々を過ごしておられるのではないのでしょうか。その最中に、神様、仏様を大切になさってこられたお父様の気持ちを否定されるような話を聞かれ、おつらかったことと思います。

私はこれまで、神様と仏様がけんかをするなんて、考えたこともありませんでした。神様も仏様も、人の幸せを願っておられるのですから、そんな暇があったら、みんなが助かるように働

いて下さるに違いないと、ご質問を拝見し、そう思いました。

金光教の教祖は、ちょっとユーモラスな感じもする、こんな言葉を残しているんですよ。

「自分の産んだ子どもの中で、一人は僧侶になり、一人は神父になり、神主になり、また、役人になり、職人になりというように、色々になった時、親は、子どもの誰かが悪く言われて、うれしいと思うだろうか」「この神は、神道の身の上も仏教の身の上も、区別なしに守ってやる」

いかがでしょうか？ 金光教の神様は、「全ての人は、神様の大切な、可愛い子どもなのだ。信仰に関わりなく、守っていくからなあ」と、広く包み込んで下さっているんですね。

山田さん、神様は、親が自分の子どもを慈しむように、「幸せにしてやりたい」と、ひたすら願い、守って下さっているんですから、安心して下さい。そして、神様、仏様を大切になさっておられたお父様のお心を受け継いで、これからも、心を尽くしてお祭りなさって下さいね。

もしそれでも、何か気に掛かることがおありでしたら、お近くの金光教の教会を、一度お訪ねになってみて下さい。



続いては、兵庫県にお住まいの会社員、博さんからのお悩みです。

「いつも、生きるヒントになる番組をありがとうございます。私は、三十三歳の二児の父親です。保育園のお世話にもなっていますが、子どもが小さいので手が掛かり、会社勤めをしている妻も、家では、家事に育児に大わらわです。

『そんな妻の負担が少しでも軽くなれば…』との思いから、家にいる時には、私も家事を手伝うのですが、『それでは綺麗にならない』『使うつもりだったのに。片付けて欲しくなかった』などと、ダメ出しされてしまいます。喜んでくれるかと思って手伝うのに、このままではつら過ぎます。家族仲良く、気持ち良く暮らしたい

のですが、どうすれば良いでしょうか？」

このようなお悩みです。

博さん、いつもお聞き下さっているんですね。ありがとうございます。

奥さんのことを思っ手伝うのに、逆に責められてしまっは、立つ瀬がないですよ。実は私も、似たような経験があるので、お気持ち、分かるような気がします。

私の場合、妻の言葉に腹を立ててしまい、「せつかく手伝っているのに…」と妻に言ってしまったんですよ。そうしたら、「そもそも『手伝う』っていうのが違っているんじゃない？」と、さらに厳しいひと言が返ってきました。でも、よくよく聞いてみたら、納得がいったんですね。

妻は、こう言うんです。「家事というのは、家族の暮らしを支えるために欠かすことが出来ない、大切な仕事でしょ。それなら担い合って取り組むのが、本当じゃないの？」

私は、その通りだと思いました。そして「手伝ってやった」と、恩着せがましい気持ちでいたことが、とても恥ずかしくなりました。

こんなことがあつて、私は、家事を「手伝う」ことをやめました。そして、自分も当然担うべきこととして、進んで体を動かすように努めているんです。

家事も、自分が生きるための大切な中身。そんな気持ちで家事に関わるようになって、変わってきたことがあります。それは、お皿を並べたり、片付けたりしながら、「今日も、食事を

頂くことが出来ました。ありがとうございます。この食事で、ますます健康で、仲の良い家族にならせて下さい」というように、祈りが持てるようになったことです。

掃除しながら住居への感謝が出来、洗濯物を畳みながら、暑さ寒さをしのげる幸せを思うことが出来る。家事は、単なる作業の時間ではないんですね。暮らしに欠かせない仕事をしながら、細やかに家族のことを祈り、今ある幸せを感じる。そんな豊かな時間になりました。

よかったら、博さんも参考にして下さい。家事を担い合いながら、夫が妻や子の、妻が夫や子の幸せを願いながら、暮らしていく。そうすることで仲良くすることが出来るのではないのでしょうか。博さんのおうちが、そんな家庭に

なりますように…。

ご質問下さった山田さん、そして、お悩みを
お聞かせ下さった博さん、今日はありがとうございます。
ございました。



《あなたへの手紙》第五回

「『金光』の意味

／自分なんて必要ない」

おはようございます。

今日担当させて頂きます、兵庫県淡路島にある、志筑教会の地田治美です。

まず、この春大学生になった光司さんからの質問です。

「僕は無事志望校に進学がかない、春から一人暮らしを始め大学に通っています。駅へ向かう途中にある、『金』『光』『教』と書かれた看板が目に残り気になっています。金光教だと知りましたが、僕の名前にも『光』という字が

あるせいで気になるのか、いつも目がいきます。

『金光』の意味が知りたくまりました。教えてくださいませんか？」

このような質問です。

光司さん、ご質問を頂きありがとうございます。志望校合格、そして進学おめでとうございます。新しい生活はいかがですか？ 慣れてきましたか？

さて、「金光」について、意味が知りたいということでしたね。

金光教は、「金光る」と書いて、「こんこう」と言います。光司さんの目に留まってうれしかったです。

光司さんと同じように金光教の看板を見たあ

る人から、こんなことを言われたことがあるんですよ。その人は、「金」という字が「お金」と結び付いたみたいで、「金光教って、『かね』という字があるから、お金に執着する金の亡者を想像した」って。「でも金光教の信心をしている人はつつましいんだね。むしろ質素な印象に見える。全くの誤解だったね」、なーんて言われました。

「金」はお金ではなく神様を表します。金光教では、神様のことを天地金乃神様とお呼びしています。その金乃神の「金」という字が、金光教の「金光る」の「金」になっているという訳なんです。永遠に輝きを失わない、世の中を明るく照らす神様です。

金光教の教祖様は、「明るい光の方へは誰で

も寄ってくる。金光とは、世界中に天地金乃神の光を光らせて、おかげを受けさせるということである」と話されています。神様の光で光り輝く世界、神様の慈しみが満ちあふれる世界が思い浮かびますね。

光司さんの名前も、光司さんの周りの世界に光を光らせるという、すぐくすてきな名前ですね。

私も、光り輝く神様のおかげを頂いて、キラキラ輝くような明るい心で過ごせたらいいなと思っています。

光司さん、初めての一人暮らしですね。大変なこともあると思いますが、経験はきっと後から役に立ちますから、体に気を付けて頑張ってくださいね。もし、悩みや問題を抱えた時は、ぜ

ひ看板が目に留まった教会へ行ってみて下さい。先生が親身になつて話を聞いてくれますよ。名前のようにキラキラ輝く大学生活を過ごされますようお願いしています。

続いては、二十代の女性、レイカさんのお悩みです。

「私は中学生の時にじめに遭い、怖くて



人と関わられません。仕事も何をしても続かず、恋愛も出来ません。自分なりに色々努力してみたのですが、何も変わりません。自分なんかこの世に必要な思いではないかと思うことがあります」

このようなお悩みです。

レイカさん、つらい経験をされ、苦しい思いの中、勇気を出して相談して下さいましたね。レイカさんは今、誰も人を信用出来なくて孤独を感じているのではないかと察します。人と関われない、恋愛も出来ない、つらいですよね。

私の友人の娘さんも、中学生の時にじめに遭った経験があつて、ちょうどレイカさんと同じ年頃だなあと思い出しました。彼女はある人から、「階段を一段一段上がっていくように、一つひとつ進んで行ったらいいんだよ」と言われ、その言葉が心に響き、背中を押されたそうです。彼女は中学校を卒業して定時制高校に進んで、高校時代からアルバイトをしていたホームセンターで今も働いています。陰の店長と言われる

程になりました。「今日一日頑張ってみよう、今日一日、今日一日」と思いながら、十年近く過ごしてきたと言います。ちなみに、今、彼氏はいないそうです。

神様のお話をさせて下さいね。神様は、人間のことを、「いとし子」、「可愛い子ども」と思ったださっています。信心しているとか、していないとか関係ありません。レイカさんのことも、掛け替えのない我が子として、どこにいてもどんな時も見守って下さり、大切に思ったださっています。神様は、命を授けた親として、私たちのことをいつも、「幸せになってもらいたい」と、願ったださっているんですよ。

そして人は人と支え合って生きています。レイカさんがいてくれることが喜びであり、支え

になっているという人が必ずいます。自分はこの世に必要な無い…、なんてことは決してありません。少なくとも私は、レイカさんに相談して頂けてありがたいですし、レイカさんが幸せであってくださることを願っていますから、レイカさんは独りぼっちじゃないんです。レイカさん、あなたはこの世に必要な人なんですよ。

このお返事でレイカさんの心が少しでも和らいで、希望が持てる切っ掛けになったならうれしいです。レイカさんが今日の一步を踏み出せますよう、私も願わせてもらいますね。

《先生のおはなし》

「信心の賜物」

京都府・東九条教会 上手正弘

以前、食事会の席でヨシオさんという知り合いの年配の男性から話し掛けられたことがありました。

「ちょっと見て下さい。今、私が着ている服は自分で買った物ではなく、全部、人からもらった物なのです」

私は、突然のことで、「どういうことですか？」と聞き返しますと、ヨシオさんは、「私が住んでいる家と、お店が火事に遭いまして、家財道具一式が焼けてしまい、全部使い物にならなくなりました。ですから、今着ている服は

助けて頂いた物なのです」と答えられました。

以前ヨシオさんのお隣の家が火事になり、その火がヨシオさんの家に燃え移り、数軒に渡って被害が及ぶ大惨事となりました。ヨシオさんは、火事に早く気付かれたことで、家族はけがなく無事であったと聞いていました。

ヨシオさんは、私が奉仕する教会に縁ゆかりのある金光教八条教会にお参りされている方でした。しかし、火事に遭われたのは数年前のことでしたので、次第に私の記憶から遠のいてしまいい、すぐに服のことと火事が結び付きませんでした。「そうでしたね。火事に遭われた時は大変でしたね」と私が言いますと、「大変でした。でもね、そんな中でも神様からおかげを頂きました」と言われます。

ヨシオさんはご自宅で飲食店を営んでおられました。火事に遭われた後は、家財道具もお店も焼けてしまいましたので、当然商売も出来ない状態になりました。ヨシオさんは教会の先生に、「当分、仕事も出来ませんし、住む所も探さなくてはなりませんので、お参りすることが出来ません」と電話で連絡されました。すると先生は、「そんなことを言うてたらあかん。常日頃から信心することも大切だけれども、難儀な時にこそ、すぐに参拝に来なさい」と言われました。

ヨシオさんは、「そうだな、こういう時だからこそ、お参りしよう」と思い直されて、教会にお参りされたのでした。ヨシオさんは、「なぜこんなことになったのだろうか?」と思いな

がら、教会のお広前でご祈念されました。すると、だんだんと次のようなことが心に浮かんできました。

「思い返せば、学校を卒業してからずっと働き通しで、足腰などは痛み、体の節々に不安を抱えている。火事に遭ったことはつらいことではあるが、仕事はもうその辺にしておいて健康のおかげを頂きなさいと神様から言われているのかもしれない」と思えてきました。また、かねてからお店の辞め時を模索されていたこともあり、「色々なことを考えたら、これは神様のおかげではないか。このまま仕事を続けていたら、体調を崩してもっと難儀な状態になって、家族に迷惑を掛けることになっていた可能性もある。家も店も焼けてしまったけれども、何よ

りも私や家族の命が無事であったことは、ありがたいことであつた」と思われたのでした。

その後、新たに住む家もすぐに見付かり、また、仕事も息子さんが経営する飲食店で働かせてもらうことになりました。自分の体調と相談しながら仕事が出来るおかげを頂かれたのでした。ヨシオさんは、「火事に遭つた前と変わらず、服も着せて下さり、食べ物も与えて頂き食べさせて下さる。日々の生活に何の不自由をすることも無いように、神様は準備して下さつていたんです」と話されるのでした。

ヨシオさんは、「自分勝手な考え方をして神様からのおかげを受けられずにいたかも知れないところを先生に参拝を勧められて、神様がおかげを下さつてに気付かせて頂いた」

と話されていました。ヨシオさんは、このことを通して、自分の信心の在り方を見つめ直す切っ掛けとされました。

これまでは神様にただ漠然とお祈りをしていましたが、まずは、日々、安全無事に生活させて頂いているお礼を申し、それから火事を通して気付かせて頂いた自分自身の健康のこと、さらに自分だけではなく家族の健康のことを願わせてもらおうと、神様へのお礼の在り方、お願いの仕方が今まで以上に心を込めたものに変わつていきました。それからはいがたいことに、悪かつた足腰が痛むこともなく、健康のおかげを頂きながら働いておられるのでした。

私は、火事に遭えば、誰しも恨みがましい気持ち湧き起こらせても不思議ではないと思ひ

ます。そんな境遇の中、ヨシオさん自身もその
思いを少なからず持ちつつ、先行きの不安を抱
きながら教会に参拝しておられたように思うの
です。しかし、神様に心を向け、お祈りするこ
とで自分にとってプラスとなるものに次々と気
付かせて頂き、それに響き合うように、周りの
環境も徐々にヨシオさんを生かそう生かそうと
整っていくことに、私は感動をもって聞いてい
ました。

ヨシオさんは火事に遭った後、教会にお参り
して、神様に心を向ける中で気持ちを切り替え
ることが出来ました。「神様からおかげを頂き
ました」と、私に話し掛けようと思われたのは、
火事に遭う大変難儀な体験をされながらも、生
かそうとする神様の働きをお感じになったから

こそでした。そのことをありがたく受け止めて
今日こんにちを迎えておられるのは、まさに信心の賜物
だと思えるのです。



《信心ライブ》

「感謝のパワー」

金光教の集会で行われた発表や講話などを録音で紹介する信心ライブ。今日は、愛媛県金光教来見教会長の塚本道晴さんが、平成二十八年七月に、ある集会で話しされたものをお聞き頂きます。

金光教では、お世話になる全てのものに対してお礼を言う心を大切にしています。塚本さんは、ある一つの例え話をお話しになりました。

顔を見てもね、口や鼻や目や眉毛がありますでしょ。でね、こんな笑い話があるんです。口が顔の中で一番下に付いているじゃないです

か。でね、口が腹が立ってきたんやね。上を見たら鼻がおる。「わしは、毎日三食ご飯を食べて、お水も飲んで、一生懸命に働いて、命を支えてるのに、顔の中で一番下に付いているのはおかしい」とね、不足が出るわけや。それで、鼻に文句を言うた。

そうしたら鼻がフンって笑った。「偉そうなことを言うな。お前は、ご飯食べたじゃ、お水飲んだじゃと言うたって、日に十回かそこらの話やないか。わしは二十四時間、お前がクツて寝ている時も息をしてやっとなるんじゃ」と。それで、けんかを始める。

ところが上を見たら、目がおることに気が付いた。「目が偉そうに、上からわしら二人のこ

とを見下しておる。腹が立つから二人で言い

行こう」と言うて、口と鼻が、その時だけは仲間になつてね、目の所に行つて、「お前、何や、わしらを見下して偉そうに」と言うたら、目がね、「お前、偉そうに言うな。食べて良い物と悪い物の見分けを付けてやってるのは、わしじやないか」と。「鼻も偉そうなことを言うな。わしがちゃんと物にも当たらんように、けがもせんように見てやってるから、お前らな、生きていけるねん」と目が言うた。

で、その上を見たら、眉毛がおる。「眉毛こそ、なーんもせずに、朝から晩まで横になつてね。こんなやつにはもう、いっちょ言うてやらないかん」と言うて、口と鼻と目とが、眉毛に文句を言いに行った。そうしたら眉毛が何と言うたか？

「私は皆さんのその働きに感謝してます」つて言うた。そうしたらね、文句を言うてやろうと思つて行つたけれど、もう言いようがないよね。つまり、それはどれが上とか下とか、どれが出来ているとか出来ていないとかいうことじゃない。口が無かつても大変、鼻が無かつても大変。みんなそれぞれの役割があつて、支え合いながら生きていますよ。その一つひとつの働きに感謝が出来ると言うことが、すばらしい生き方で、そこにしか、生きた働きというか、おかげというものは、生み出されてこないんだつていうことを教えて下さっているんですね。

感謝の心やお礼の心というのが、どれ程のパワーがあるかということですが、今お話しした

口や目の話を聞かれた人がいるんですね。その方は、お父さんを早くに亡くされて、若くして、中小企業の社長さんになられたんです。

ところが、社長になってから、三年間ずっと

赤字。三年連続、赤字を出したらね、ちよっと会社も危ない。ですからその若社長はね、あっちこっちの経営セミナーや研修会に出られた。

そうしたら、色々と分析してくれた。人件費が高いとか、固定費が高いとか言われた。どこに行ってもね。確かにその通りだけれども、その方はね、それだけが問題じゃないと思った。

そんな時、今の目、口、鼻の話を聞いてね、ハタと気が付いた。わしは奥さんに今まで感謝の気持ちを持ったことがなかった。ありがとうと言うたことがなかった。自分の会社の社員に、

おれなんか、なんで言わないかのかと。わしが給料をお前らにやっとなるじゃろうがと。その働きに見合うことをしないから、というぐらいに思っていた。

ところが、この話を聞いてね、家内に頭を下げて謝って、「本当に感謝が足らなかった、ごめん」と。そらそうなんですよ。会社で自分は一生懸命しているつもり。家では奥さんが、温かいご飯や、お風呂を沸かして待ってくれているわけじゃないですか。そのことにありがとうも、何とも思わん。「わしがもらってきた給料で、生活を成り立たせてやってるんじゃない」ぐらいの気持ちでおったわけなんです。従業員に対しても同じです。

ところがそこに気が付いたんやね。一人ひと

りが大切な、一人ひとりが会社の中で一生懸命
してくれている、そのことに対して、何とも思
うてなかった。従業員を集めて、「これまでご
めんなさい」って、「あなたたらに本当にお世話
になってありがとうね」って。「感謝します、
お礼を申します」って言われた。その次の年か
ら、だんだんだんだん業績が上がっていった。
費用対効果とか、それも大切ですよ。けれど、
一番大切なのは、お礼の心。感謝をさせて頂く
ところに、神様が働けるんですね。

「お世話になります。ありがとう！」。

一見特別な言葉ではないように思いますが、
改めてその言葉の持つパワーを感じました。感
謝することで、神様がより一層働いて下さるん

ですね。忘れないようにしたいと思います。
今日一日が、グチや不足の出ない、穏やかな
日でありますように…。



感謝

《先生のおはなし》

「幸せが実る、心」

福岡県・不知火教会 池本ひろ江

私は、幼いころ、アトピー性皮膚炎がひどく、

そのことで、よくいじめられていました。学校が嫌いな私は、幼いころからお参りしていた金光教の教会が心のよりどころとなっていました。

「どうして、私ばかりがづらい思いをするんだろう？」と悩んでいた私に、教会の先生がお話して下さったことがありました。

「作物が作られるには、日の光や雨、そして豊かな大地が必要です。大地は、どんなに汚いものも、栄養にして作物を作ります。心も同じ

で、つらいこと、嫌なことを黙って治め、自分の心の栄養にしていく大地の心になれば幸せが実ります。神様は、常にあなたたちの心を育てようと働き掛けて下さっているんだよ」と教えて下さいました。

私は、先生のこの時のお話が後々のちのちしみじみと心に深く感じるようになりました。小学四年生のある日、学校でいじめられ、母に泣きながら悔しい気持ちをぶつけました。

「なんで私ばかりつらいことがあるの？」
母は優しく受け止めてくれました。

「つらかったね。悔しかったね。よく辛抱したね。教会の先生が教えて下さったでしょう？
つらいこと、悲しいこと、全部あなたの心の栄養になることを。心が強くなるための神様の

お働きよ。だから元気な心で受けていこうね」と優しく話してくれましたが、なかなか元気が出ません。そんな時、私宛に鮮やかな色で描かれた凧揚げたぎあのセットが届きました。

思い掛けないプレゼントにびっくりしました。母が、「神様が応援して下さってるね！

凧は、風がないと飛ばないでしょ？ 風が吹けば吹くほど高く飛べるよね。いじわるを言うってくる子は強い風。ここを元気な心で受けたら楽しめるよ。元気な心で受けていこうよ」と話してくれました。私は、「神様が、常に応援して下さっているんだ！」と感じたら、心が明るくなり元気が湧いてきました。

このような体験を重ねていくうちに、「アトピーになったことも無意味ではない。神様が私

の心を育てようとして下さっている」ということを強く実感するようになりました。いつのまにかアトピー性皮膚炎もすっかり治り、性格も、体質も変わっていました。

幼いころのこの体験は、子育ての場面でとても役立つています。娘が小学五年生の時のことです。ある日、「学校に行きたくない」と沈んだ顔で相談してきました。「リーダー的存在の子が、仲の良い子を無視しようと言っている。でも、自分は、したくない。でも、断ったら自分がいじめられる」と話してくれました。私は心配が頭をよぎりましたが、「娘が本気で神様に向き合う時が来たのだ」と思い、自分のいじめの体験を娘に伝えました。

娘は真剣に聞いてくれました。最後に私は、

「つらかったね。話してくれてありがとう。あなたの心が強くなる稽古だよ。だからもし、いじめられても大丈夫。お母さんも、神様もついてるからね」というと、娘は、たちまち笑顔になり、元気に登校しました。いじめられている子に勇気を出して、「おはよう！」と声を掛けたことから、いじめは解決しました。

この体験のおかげで、娘は、問題を通して自分が変わること、心を育てることを学びました。いじめられた子、いじめた子どもたちとも、今も仲良しです。以来、問題が起きたら心の点検と、自分の心作りが、私たち親子のありがたい答えの出し方になっています。

その娘も今では高校生になり、友人関係の悩みも複雑になってきました。しかしその問題こ

そ、心のお育てを頂く掛け替えのない成長の場でもあります。また、問題に直面した時に、どう乗り越えていくのか。どう答えを出していくのか。その答えの出し方を伝えていく大切な時でもあると感じています。

ある日、友人に裏切られた悔しさを訴えてきたことがありました。「また、あの子が自分勝手なことをしてね…」と娘が言います。「そっかー」と、私は相づちを打ちながら、心の中で祈りました。「どうぞ、この問題を通して、私と娘の心が育ちますように」。

そして、私自身の心の点検をしました。実はこの時、私は、考え方が合わない人を、心の中でずっと責めていたのでした。口には出さずとも、冷たい態度を取っていました。考え方が合

われない人を受け入れ切れない小さな心。自分の
私の強さが嫌になつていました。

例え、言い分が正しいとしても、友人を責め
る娘の姿と自分が重なり、「神様が娘の姿を通
して、私に改まることを教えて下さっている
んだなあ」と感じました。そして、娘の話を聞
いて、私自身が気付かされた反省すべきこと
を話しました。すると娘は、「なるほど。私も気
付かないといけないところがあるから、この問
題も起きてるんだね。心の点検だね」と落ち着
きを取り戻してくれました。

それから数日後、「私の心にも見下すような
心があることに気付いて、責めずにいたら、友
達も変わってた。黙って治めて良かったよー！」
と生き生きと笑顔で話してくれました。

娘は、今では、友人関係に悩んでいる子の相
談にのることもあります。素晴らしい友人に恵
まれ楽しくありがたい学校生活を送らせて頂い
ています。初めは、「どうして？」と思うよう
なことも、「心の点検」をしていくと、「なる
ほど！」という答えが出てきます。心が育つて
いく喜びと、神様に守られている安心が得られ
るから、ウキウキワクワクの毎日が送れます。
どんなにつらいことも自分の心の栄養にしてい
く大地の心は「幸せが実る心」だと実感して
います。



《先生のおはなし》

「心のよりどころ」

富山県・石動教会 宮田美子

昨年の夏は暑さが厳しく、体の不調を感じられたり、気持ちが落ち込んだり、いら立ちを抑えられなかった人もあったかもしれません。そんな中で教会にも二人の方が助かりを求めて、駆け込んでこられました。

一人は七十歳の利男さんでした。

利男さんは、私が奉仕する金光教の教会に、いつも熱心に参拝され、教えに触れ、金光教との出会いを喜んでおられました。

七月の初め、「耳鳴りがひどく、何とかおかげを頂きたい」と教会に来られました。いつも

の穏やかな笑顔は見られず、表情のない能面のよ様な顔で、ヨタヨタしながら参拝してこられ、とてもつらそうでした。

突然、両方の耳にセミが鳴いているような騒音が響き、そのうち止むだろうと、つばを飲んだり、耳を引っ張ったりされていました。それでもいつこうに良くならず、まずは耳鼻咽喉科いびんこうに行かれ、検査をされましたが、年相応の聞こえの悪さはあっても、全く異常なしだったそうです。

家族の人も心配され、近くの内科や総合病院の神経科に一緒に行つて受診されましたが、原因は分かりませんでした。

耳鳴りから、だんだん眠れなくなり、ひどい不安が襲い、次から次へ心配が広がっていき、

パニック状態の毎日に見えました。

あれだけ大好きだった参拝も、だんだん足が遠のき、眠れない不満を皆にぶつけられ、これまで祈られ助けられてきた自分が、以前ほど神様を実感出来ないことにいら立っておられました。

私は、出来るだけ利男さんの思いに寄り添って受け止め、話しを聞かせてもらい、「一緒に神様にお願ひしましょう」と、不安や心配を祈りに変えて、自分の力ではどうしようもないことを、神様からのメッセージと受け止められるように共に祈っていました。

しかし、利男さんの体調は良くならず、眠れない日が続いていました。

そんなある日、苦しみのため、神様までも疑

い、不幸を嘆いておられた利男さんが、一心の祈りの中から、「すべて神様にお任せしよう」と決心され、薬も祈りを込めて頂かれるようになってきました。

するとありがたいことに、「三時間は眠れるようになりました」と喜びいっぱいに話されるようになり、少しずつですが、耳鳴りが治まってきた、落ち着きを取り戻されました。そして今、再び、「神様の働きの中に、生かされて生きています」とお礼を申される生活を送っております。

さて、昨年夏にもう一人、どうしても助かりたくて、教会に飛び込んで来た人がいます。

「あなたの悩みを聞かせて下さい」と書かれた外の掲示板を見て、朝、私が外に出て来るの

を待っていた中学校の制服を着た少女がいました。「すみません、お金はいくらですか」と声を掛けてきました。

「おはよう、お金はいりませんよ。ちよつと中に入って話をしませんか」と誘うと、ためらいながらも中に入ってきました。

二人で大広前の椅子に並んで座ると御神前をジーっと見ていたのですが、別に質問するわけでもなく、悩みを打ち明けるわけでもなく、出したジュースだけを飲んで、「ありがとうございます」と部活に出掛けて行きました。

それから一週間ほどして、玄関のチャイムが鳴り、出ていくと、先日の少女、ミキさんが立っていました。

「あら、こんにちは、どうぞ」と勧めると、

今度は力強く、「はい、ありがとうございます」と中に入ってきました。また大広前の椅子に並んで座ると、ポツポツ話し始めました。

やはり、学校でいじめがあり、心ないいたずらをされたり、仲間外れにされていることを不安そうに訴え続けました。私は、悩みを訴えるミキさんと、どう向き合ったらいいのか分からなかったのですが、「大空に高く揚がる風は、風を受ければ受けるほど高く揚がるんだよ。きつと今、その風を受けている時だよ」と、不安で押し潰されそうになっているミキさんに話をしました。そして、これから安心して学校生活を送れるように、「一緒に神様にお願ひしよう」と声を掛け、二人で手を合わせ、祈りました。

それからです。時々ですが、ミキさんは、朝、

学校に行く途中、教会にちょっと寄って、「おはようございます」と声を掛けて登校したり、下校時には、「水を飲ませて下さい」とか「トイレを貸して下さい」などと理由を付けて、元気に教会にやって来るようになりました。

たぶん、まだ神様の存在も、金光教という宗教もよく分かっていないと思いますが、「あそこに行けば、うれしい。何か安心出来る」と、喜びを感じてくれれば、これからの長い人生において、きっと大きな支えになっていくことと思います。

私自身もこのミキさんとの出会いから、改めて日々神様のおかげの中に生かされて生きていることにお礼を申し、何が起こるか分からない生活の中で、「ありがとうございます」と受け

ていける信心の成長を願い、あまり先のことまで考えず、今を大切に、神様から頂いた時間をしなやかに乗り切って行きたいと願っています。

冒頭にお話した、長い間お参りを続けてこられた利男さんにとっても、初めて神様に触れたミキさんにとっても、教会という所が、心のよりどころとなっていけるように、また、不安や心配が祈りに変わって前向きに生きていけるようにと願っています。



金光教本部 ラジオ放送係

住所 〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷320

電話 0865-42-6453

FAX 0865-42-2114

メール w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

ニッポン放送	日曜日	あさ4時30分
東海ラジオ放送	金曜日	あさ5時25分
朝日放送	水曜日	あさ4時50分
RKB毎日放送	日曜日	あさ6時50分

ここで聴くおはなし

検索

